わたしの聖戦 ジ・ハード

◎◎女性が働くということ◎◎ 95

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

学生事情と教育現場

4年ほど前から、本格的に教壇に立つようになった。相手は医療系の資格を目指す学生だ。

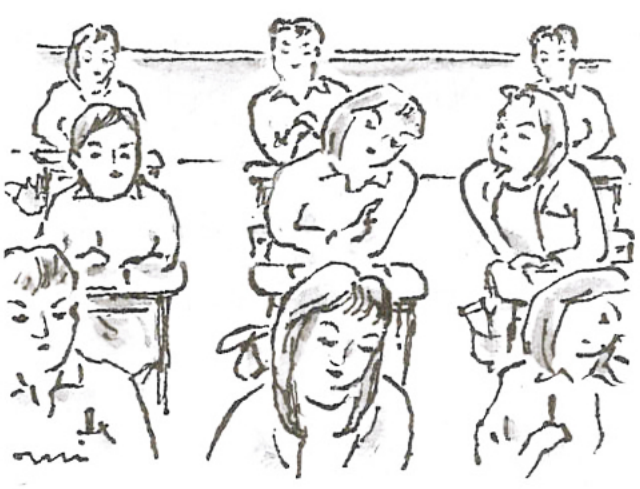
資格を得るための学校に入学するのは、もちろん高校卒も多いが、社会人や大学中途者も結構いたりする。不況になると、資格を取ることがもてはやされる傾向があり、一生食いっぱぐれのない資格を求めて学校にやってくる。

年齢もバックグラウンドも実に多種多様であるところが、やりがいもある一方で教えるという作業を難しくする。まず、学力の差が相当にある。同じ問題でも満点の100点を取る子もあれば、20点前後しか点数を稼げない子もいる。

小学校のような低学年に比べると、長く生きていればいるほど得意不得意分野がはっきりしてくるし、これまでどれだけ勉学に時間を費やしてきたかにおいてどんどん差が開いているから、おのずと学力に相当の違いが露呈する。そんな多種多様な学生に接するのは楽しい反面、なかなかと骨も折れる。

教育の分野では新参者なのであまり偉そうに物事を言える立場ではないが、巷で問題視されるように、学生の学力は確実に落ちているのを実感する。ただしこれは、学校の勉強において、であって、例えばこちらが苦手なコンピューターゲームや携帯の扱い方といった新しいことは断然彼ら彼女らのほうが長けているのは間違いない。

また、基本的な姿勢、つまり90分から100分の間机に座って「学ぶ」ことがどういうことなのかまったく知らない子が多い。絶えず隣同士で喋ったり何かしらの別のことをしていたり、意識がそこにない子が目立つ。長い時間の中で多少集中力がぶれることは致し方ないと思うが、最初から最後までずっとそのような風では、いったい何をしにここにいるのだろうと不思議な思いさえ沸き起こってくる。高い授業料払って来ているのにもったいなくはないのかと思うが、そう言った途端「高いお金払ってるんだから嫌なことさせないでください」と言い返した学生もいるというから、もうこうなってくると学生と教員の関係というより、日々戦いである。



教育とは洗脳である。…と信じている。最終目標は資格を取得し、その職にふさわしい教養を身につけ、国家試験に合格するところにある。そのために必要な科目を履修し、実習をこなすのだ。入学当初は動物園の小猿にも似た学生たちが、1年経ち2年を過ぎるようになると、外見も含めてそれなりになっていく。さながら蝶に変身するかのごとく、まさに洗脳され社会の一員として溶け込んでいこうとする姿を見ることができる。

社会に出てからも日々勉強であり、今度は社会の諸先輩たちからの洗脳の儀式を受けながら、他人とは違う自己を形成し自分だけの人生を歩むことになる。私はそのほんのお手伝いをしているに過ぎないという自覚を持ちながら、実はこちらもかなりの影響を学生から受けていることを認めざるを得ない。

教育は学生との、あるいは自分との戦いの場であり、洗脳の結果があらわれる場面をはらむ。このような現場を真に「神聖」な領域と呼ぶのではないだろうか。

最近はそんなこともよく思う。

イラスト・三浦義雄